



会員寄稿

親の背中

保健・教育相談課 森永 友子

実家の片づけをしていると、中学校PTAの雑記帳に寄せた私の母の文章が出てきました。その文章には、次のようなことが書かれていました。

先日、中学校のPTAの会合で、「子どもに勉強をしてもらうために親はテレビを消して静かにし、子どもの気の散らないようにしている」という意見が出され、それは良いことだと皆さんが賛同の意を示されました。また先年、小学校のPTAでも「子は親をまねて育つのだから、親は子どもの前で寝そべてテレビを見てはならない」などという意見がありました。

誠にもっともな意見だと思う反面、私はなぜ子どもたちは、「私たちが一生懸命勉強しているのに親はテレビばかり見ている、寝そべている」ではなく、「一生懸命私たちのために働いているのだから、ゆっくりテレビを見せてあげたい」と思えないのかと不思議に思ったのです。

親を見て育つということは、親をより深く理解するということで、親は子どものために生きるのではなく、自分の人生を精一杯生きて、その姿を子どもに教えることではなかろうかと思うのです。子どものために気を遣い、かえってひ弱な甘えた子ども、親は子どもの犠牲になるのは当たり前といった不遜な子どもを育てているのではないのでしょうか。

今、各地で問題となっている中学校内の暴力事件。甘やかされて育った子どもが、自分は世の中の中心であると錯覚し、自分たちの主張はいつも正しく、それが通るのは当たり前だと思って反省しない。暴力に訴えても自分の主張を通そうとする子どもが事件を起こしているのではないのでしょうか。自分だけが世の中の中心ではなく、多くの人々の中のほんの一部に過ぎないのだということを深く認識させるような育て方をしたいものだと思ふのです。

私は今年87歳の母にそのような強い思いがあったことを知り、うれしく思いました。私には3人の子どもがいます。母の思いとはかけ離れて私の子育ては、時間に追われ、余裕もなく「いい加減」だったかもしれません。長男は高校時代の夕御飯が「おでん」だった翌日の「おでん弁当」は嫌だったと今でも言いますし、次男からは「お母さんは過保護すぎるんよ」と言われたこともあります。本当に子育ては、なかなか難しいものですね。